

【直訳】

15 だがもし 罪を犯すなら 「あなたに対して」 あなたの兄弟が、

行きなさい、忠告しなさい、彼に あなたと彼だけの間で。

もし あなたに 彼が聞くなら、

あなたは得た あなたの兄弟を。

16 だがもし 彼が聞かないなら、

連れて行きなさい、あなたと共に さらに 一人を あるいは 二人を、

ようにと 口の上に 二人の 証人の あるいは 三人の

確定される すべての ことが。

17 だがもし 彼が聞き従わないなら 彼らに、

言いなさい、教会に。

だがもし 教会にさえ 彼が聞き従わないなら、

彼はありなさい、あなたにとって 異邦人と徴税人のように。

18 まことに 私は言う あなたがたに、

何であれ あなたがたが縛るなら 地の上で

あるだろう 縛られていて 天の中で、

そして 何であれ あなたがたが解くなら 地の上で

あるだろう 解かれていて 天の中で。

19 再び 「まことに」 私は言う あなたがたに 次のことを

もし 二人が 一致するなら あなたがたのうちの 地の上で

すべての物事について

それが何であれ 彼らが願うなら、

それは起こるだろう 彼らに 天の中にいる私の父から。

20 なぜなら ところに ある 二人 あるいは 三人が

集められていて 私の名前の中へ、

そこに 私はいる 彼らの真ん中に。

【新共同訳】

15 「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。16 聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。17 それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。

18 はつきり言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐがれ、あなたがたが

地上で解くことは、天上でも解かれる。19 また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。20 二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである。」

①構成

② マタイ 18章は次のように展開している。

A 1 | 14節

1 | 9節 弟子の問い (天の国で一番偉いのは誰か) とイエスの答え

「わたしを信じるこれらの小さな者」への注目

10 | 14節 「迷い出た羊」のたとえ

「これらの小さな者」の一人の大切さ

B 15 | 20節

「兄弟があなたに対して罪を犯したなら」

C 21 | 35節

21 | 22節 ペトロの問い (何回赦すべきか) とイエスの答え

「兄弟がわたしに対して罪を犯したなら」

23 | 35節 「仲間を赦さない家来」のたとえ

御父の慈しみの大きさ、赦すことの大切さ

「心から兄弟を赦さないなら」

③ 15 | 19節はすべて条件文で出来上がっている。15節一・三行目、16節一行目、17節一・三行目、19節二行目に「もし」という語がある。18節には「もし」はないが、二・四行目の「何であれ…なら」は普遍的・反復的条件を表す表現である。このように、15 | 19節はすべて条件文で出来上がっているが、20節だけは「なぜなら」で始まる理由文である。つまり、20節は15 | 19節全体にかかっていると見ることが出来る。

④ そこで、大きくは、15 | 19節の条件文と20節の理由文の二つの段落に分けることができるが、さらに15 | 19節は二つに分けることができる。15節二行目、16節二行目、17節二・四行目の帰結文は命令文であるが、18 | 19節の帰結文は未来形で書かれている。また、15 | 17節は「あなた」という単数形が用いられているが、18 | 19節では「あなたがた」と複数形が用いられている。これらの理由から、15 | 17節と18 | 19節、そして20節の三つの段落に分けることができる。

②兄弟を得る (15 | 17節)

⑤ 第一段落では、罪を犯した兄弟に対してどのような態度を取るべきかが書かれている。この段落の直前には (10 | 14節)、九十九匹を残して、迷い出た一匹の羊を捜すというたとえが述べられている。このたとえの最後には、「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」とある。この言葉に続いて、15節以下が語られるのであるか

ら、この言葉との関連を15節以下の言葉の中に見ることが大切だとと言えるだろう。

⑬ 15―17節には、条件文と命令文の組み合わせが4回繰り返される。

もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、忠告しなさい

もし聞かないなら、連れて行きなさい

もし聞き従わないなら、教会に言いなさい

もし聞き従わないなら、あなたにとって彼は異邦人や徴税人のようにありなさい。

この流れをさえぎるように、15節三・四行目には条件文と平叙文の組み合わせが現れる。

もしあなたに彼が聞かぬなら、あなたは兄弟を得た

これは、15―17節の忠告の根本精神を表している。罪を犯した兄弟に対する忠告は「兄弟を得る」ために行われなければならない。この段落の直前には、「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」と述べられている。すべての忠告は「兄弟を得る」ために行われる。なぜなら、それが天の父の御心、神の思いだからである。

⑭ 兄弟の誤りを率直に戒めるようにという勧めは、レビ記19章17節「心の中で兄弟を憎んではない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない」に見られる。山上の説教でも、兄弟同士が仲たがいでいる場合、神に捧げ物を供える前に、まず彼と和解するようにとイエスは勧めている(マタイ5:23―24)。

⑮ 「迷い出た羊」のたとえの結び(一八:14)に「滅びる(失われる)」が用いられているが、これに対して、ここでは「得る」と言われている。また、使徒の手紙では宣教上の術語として、入信者を「得る」の意味で用いられている(1コリ9:19―22、1ペト3:1)。

⑯ 16節に「連れて行きなさい、あなたと共に、さらに一人あるいは二人を」とある。ある事が真実であるかどうかの証明には、少なくとも二人以上の証人が必要であったが(申一九:15)、それがキリスト者の共同体にも適用されている(申一七:6、民三五:30、1テモ五:19、2コリ一三:1も参照)。

⑰ 17節の「聞き従わない」はギリシア語のパラクーオーである。この動詞は「そばで聞く・聞き流す・聞こうとしない」を意味する。兄弟への忠告を、まずひとり、次に、次いで一人か二人の兄弟と一緒に、そして最後に教会という公の場で行うようにと述べるのは、忠告の目的が非難中傷にではなく、兄弟を「得る」ことにあるからである。申命記19章15節の原則、「いかなる犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人の証言によって、その事は立証されねばならない」はクムラン宗団の規則やダマスコ文書にも見られるが、マタイのような兄弟を「得る」ためという積極的な意味づけは、ユダヤ教にはない。⑱ キリスト者共同体から逸脱した兄弟に忠告し、時には排除するようにという勧めは、他の新約文書にも伺えるが(1コリ五:2、2テサ三:6―15、2ヨハ10、十二使徒の教訓一五:3)、マタイはその動機を教会と結びつけ、教会のうちにいる復活したキリストへの信仰から見ている(特に、20節を参照)。

⑲ 教会にも聞き従わない者は「異邦人と徴税人のように」なる。旧約聖書では、ヤーウエを知らない民族(エレ一〇:25)は異邦人、異教徒であり(ネヘ五:8)、聖なる選ばれた民イスラエルと区

別されている。新約聖書の教会は自らを「新しいイスラエル」と理解したので、救済史的には、真の神を知らない諸民族(1テサ四5)、つまり異邦人(異教徒)と対立関係にある。ラビは「徴税人」を、不正に金を得ようとする人間と見なし、一種の汚れた者として彼らを扱い、盗人や強盗の同類とした。

③天の父から(18―19節)

① 18―19節の「あなたがた」は20節との関連で見ると、「イエスがその真ん中」にいる二人あるいは三人、つまり「教会」を指しているだろう。また、18―19節には「地」と「天」の対比が3回繰り返されている。この対比は教会の有り様を表している。教会は天に向けられているが、現在はまだ地にある。教会が「地の上で縛ることは何であれ、天の中で縛られているだろう、地の上で解くことは何であれ、天の中で解かれているだろう」というこの言葉は、教会の権威を述べているが、その権威は人間から来るのではなく、教会の中心にいるイエスから、そして天から来る。教会の下す決定が力強いものであるのは、教会の行動が神の思いを現すものだからである。地上で教会が一致して願う事はすべて、「天の父から」起こる(19節)。「天の父から」に用いられた「から」は、由来や起源を表す。地は天と関わることによって初めて意味を持つものとされる。② 18節の「縛る(つなぐ)」は「許さない」、「解く」は「許す」の意味である。ここでは16章19節の表現が繰り返されている(ヨハ二〇23参照)。「縛ること・解くこと」は、ユダヤ教のラビの権威を表す言い回しである。律法の教師として、ラビは「つながれていること」(＝禁じられていること)と「解かれていること」(＝許されていること)を説明し、また会堂からの追放を命じる権限を持っていた。

③ 16章19節では、イエスの言葉と教えを解釈し、信者の具体的生活にそれをあてはめる際の権威が弟子の代表としてのペトロに授けられていたが、ここでは、「あなたがた」、すなわち、教会共同体に与えられている。弟子たちの決定は天上で神が下す決定と一体であり(18節)、その権威は彼らの共同体に現存するイエスから来る(20節)。

④ 罪を犯した兄弟への忠告は二人か三人の兄弟によって行われるが、祈りにおいても「二人が一致する」なら、その祈りは神に聞き届けられる(19節)。「一致する」と直訳した動詞シムフォネオーはシユン(共に)とフォーネオー(音を出す・叫ぶ)の合成語である。また、祈りが聞き届けられるという確信は、20節の「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」という信仰に由来する(マラ三16参照)。

④イエスが中心に(20節)

① 20節は15―19節にかかる理由文である。罪を犯した兄弟への忠告は、兄弟を神の国のために得るために行われる。その根本にあるのは、20節の主張である。兄弟を神の国のために獲得することとは、人間だけの努力によるのではなく、そこには真ん中にいるイエスが共に働いている。

② 20節の直訳、「私の名前の中へ」で「の中へ」と直訳したのは前置詞イエスである。28章19節では「父と子と聖霊の名の中へと洗礼を授ける」と用いられている。この「の中へ」は、28章19節と同様に交わりや従属を表すか、あるいは、行動の原因や理由を表すと取ることもできる。イエスの名前のために集まることは、ユダヤ教徒が律法のために集まることに類似している。2世紀

前後に成立したと言われているユダヤ教の文書に、二人の者の間で律法の言葉が話題になるときには、両者の間には「偏在者」がおられる、という文言を見ることが出来る。「偏在者」の原語は「シェキナー」で神の臨在を表す表現である。マタイではユダヤ教の律法に代わってイエスが置かれている。イエスは神の「シェキナー」(神の遍在者・神の住まい)として弟子の真ん中にいる。

◎「そこに私はいる、彼らの真ん中に」というイエスの言葉はマタイ福音書の主要テーマである。イエスは、「キリスト」「アブラハムの子」「ダビデの子」「ナザレ人」「インマヌエル」といった名でも呼ばれるが、これらの名はそれぞれにイエスの人となりや使命、また、神との特別な関係を示している。なかでも、「インマヌエル(神は我々と共におられる)」は(一23、二八20)、神がその民と共にいるという信仰を表す名であり、マタイにとって重要である。

⑤ 神の光にさらし、兄弟を得る

① マタイ18章は「教会の章」と呼ばれている。1―9節では、イエスを信じる「これらの小さな者」を受け入れ、つまずかせないことが弟子に求められ、10―14節には「迷い出た羊」のたとえが述べられている。たとえの結びには「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」とある。しかし神の御心を知らず、罪を犯す者がいる。そこでイエスは、直訳にあるように「だがもし罪を犯すなら」と話し始める。兄弟が罪を犯したなら、報復するのでも、見過ごしにするのでもなく、忠告をする。「兄弟を得る」ために、「小さな者」を心にかける神の思いを知らせることが、ここで求められている忠告である。

② しかし、忠告を聞かない者もいる。その場合にも、「兄弟を得る」ために繰り返し忠告しなければならぬ。「忠告する」と訳した語は「光にさらす」を意味する。忠告とは、滅びを望まない神の光にさらし、神の思いへと向けさせることである。この忠告は途中で投げ出されてはならない。16―17節の直訳を見ると、「だがもし」が3回繰り返し返されている。この繰り返しによって、忠告を聞かない者に最後まで寄り添う姿勢が表されている。

③ 一人で忠告しても聞かないなら、「二人か三人」で忠告し、それでも聞かないなら、「教会」に言いなさいとイエスは命じる。教会には、その中心にイエスがいるからである(20節)。教会にも聞き従わないなら、最後はイエスが裁きを行う。その人は「異邦人や徴税人」と同様に、神に従わない者と見なされる。イエスを中心とする教会に聞き従わないことは、神に従わないことと同じだからである。

④ 「あなたがた」は「地」の上にあって、「天」の父と結びついている。教会が下す判断は天の父の判断を表す。あなたがたのうちの二人が願うことは何でも実現するが、それを起こすのは「天の父」である。教会の願いは、それが神の思いを表すものである限りにおいて実現する。教会がすべてを縛り、すべてを解く権威を与えられているのは、その中心にイエスがいるからである。

⑤ 教会はイエスの名のゆえに集められ、イエスの名の中へ(イエスとの交わりの中へ)入れられた者の集まりである。その中心にはイエスがいる。「インマヌエル」と呼ばれるイエスが、そこにいることを知らせるために、教会は罪を犯した者への忠告を続ける。罪を犯した者を忠告するときも、裁くときにも、教会の行動は、小さな者が一人も滅びないことを願う神の思いに従うものでなければならない。